



2015年5月 第13巻第5号

### かく語りき—聖人の言葉

「すべては心次第です。心の浄らかさがなければ何一つ成し得ることはできません。求道者はグルや主、主の信者らの恩寵を受けることはできても、『あるもの』の恩寵がなければうまく行かない、と言われていています。その『あるもの』とは、心です。求道者の心が自身に対し慈悲深くなければなりません」

(ホーリー・マザー シュリー・サーラダー・デーヴィー)

「イエスが言った。あなたがたがあなたがたの中にそれを生み出すならば、あなたがたが持っているものが、あなたがたを救うであろう。あなたがたがあなたがたの中にそれを持たないならば、あなたがたがあなたがたの中に持っていないものが、あなたがたを殺すであろう」

### 今月の目次

- ・ かく語りき—聖人の言葉
- ・ 2015年6月の予定
- ・ スワームィー・ヴィヴェーカーナンダ 第152回生誕記念祝賀会 東京・インド大使館にて開催
- ・ スワームィー・ヴィヴェーカーナンダ 第152回生誕記念祝賀会 「開会の辞」インド大使館主席公使 アミット・クマール閣下
- ・ スワームィー・ヴィヴェーカーナンダ 第152回生誕記念祝賀会 「日本におけるインドの文化」 上智大学教授 ヴェリヤト・シリル 神父
- ・ 忘れられない物語
- ・ 今月の思想

### 6月の予定

#### ・ 生誕日

Vishuddha Siddhanta 暦では、2015年6月に生誕日はありません。

#### ・ 協会の行事

6月6日(土) 14:00~16:00  
東京・インド大使館例会

講演：バガヴァッド・ギーター（無料）  
場所：インド大使館：03-3262-2391  
お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428  
\*IDカード（免許証など写真つきの身分証）を必ずお持ちください。

6月13日（土）サットサンガ in 名古屋  
お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428

6月14日（日）サットサンガ in 多治見  
お問い合わせ：上野 090-6363-8558

6月7日（日）、14日（日）、21日（日）、  
28日（日）  
14:00～15:30

ハタ・ヨーガ・クラス

場所：新館アネックス

\*体験レッスンもできます。

お問い合わせ：080-6702-2308（羽成淳）

6月16日（火）10:00～12:30  
火曜勉強会（チャンティングと福音）  
場所：本館

※毎月第1、第3火曜日予定

6月20日（土） 14:00～16:00  
ウパニシャッド スタディークラス  
講演：ウパニシャッド（無料）  
場所：インド大使館：03-3262-2391  
お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428  
\*IDカード（免許証など写真つきの身分証）を必ずお持ちください。

6月21日（日） 10:30～16:30

逗子例会

場所：本館

午前：講話 鎌倉雪ノ下カトリック教会  
川崎神父様のお話

「キリストの純粹さの概念」

午後：朗誦・輪読・講話

6月26日（金） ホームレス・ナー  
ラーヤナへの奉仕活動  
現地でのお食事配布など。  
お問い合わせ：佐藤 090-6544-9304

## スワームー・ヴィヴェーカーナンダ第 152回生誕記念祝賀会、東京・インド大 使館にて開催

日本ヴェーダーンタ協会は、5月17日（日）午後2時から東京・インド大使館にてスワームー・ヴィヴェーカーナンダ第152回生誕記念祝賀会を開催しました。毎年恒例のこの祝賀会など様々な行事のために、インド大使館には継続的にご支援ご協力をいただいておりますが、今回も大使館の素晴らしいホールや施設を無償で貸与いただきました。協会の祝賀委員会および協会会員より心から御礼を申し上げます。

当日のプログラムは、スワームー・メーダサーナンダ（マハーラージ）と協会の4人の信者によるヴェーダの祈りで始まりました。次に、インド大使館主席公使のアミット・クマール閣下によるスワームー・ヴィヴェーカーナン

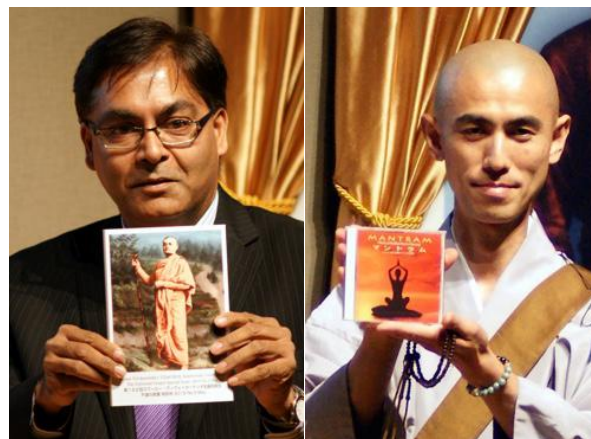
ダへの花束奉納の儀式を行いました。続いてクマール公使に、協会発行誌『普遍の言葉 特別号』をご披露いただき、開会のご挨拶をいただきました。(クマール公使のスピーチは、ニュースレター本号に掲載)



次に、仏教僧侶で協会の友人でもあられる鈴木法拳上人に、協会の新譜『マントラム』のCDをご披露いただきました。このCDには、ヒンドゥー教と仏教の伝統において最も重要で高い潜在力を秘めているとされる、ガーヤットリー・マントラやマハームリットウンジャヤ・マントラなどのマントラが収録されており、どのマントラもインドと日本の僧侶が詠唱しているため、マントラの聖なる真正の力が感じられます。

その後、マハーラージと法拳上人により誘導瞑想が行われ、来場者は数分間瞑想をしてオームの聖音を唱和しまし

た。そして、「日本におけるインドの文化」をテーマに、講演者の方々にスピーチをいただきました。



最初のスピーチは、上智大学教授のヴェリヤト・シリル神父でした。ヴェリヤト神父は「日本におけるインドの哲学と宗教」に焦点を当て、ヒンドゥー教と仏教に共通して見られるインド哲学の核心部分や、数千年間にわたって両宗教が互いにその一部を取り込んでいったことなどに触れられました。そして、インドの思想が日本に伝えられたのは、中国から伝わり他の宗教と同化した仏教を通じてであると述べられました。最後に、内なる美、魂の美しさこそが、インドと日本の古の思想家らが探求を促すものであると仰いました。(ヴェリヤト神父のスピーチは、ニュースレター本号に掲載)



次に、ジャパンビジネスサービス代表のジャグモハン・チャンドラーニさんにスピーチをいただきました。インド

料理店「スパイスマジック カルカタ」(www.spicemagiccalcutta.com)の創設者でもあるチャンドラーニさんは、インドの食文化を中心に話しされ、食の健康、安全、調理法、保存法などを網羅した食の哲学がアーユルヴェーダであること、アーユルヴェーダは青銅器時代に一大文明を築いたインダス文明の人々の健康と社会の調和のために発達した科学であったことを述べられました。また、アーユルヴェーダの栄養学では「ラサ(味)」のバランスが大切であり、インド料理は時の経過と共に世界中から様々な材料を取り入れて作られるようになったとのことでした。(チャンドラーニさんのスピーチは、次号以降のニュースレターに掲載の予定)



次に、パドマ・ヨーガ・アシュラム (http://www.padma-yoga.jp) 代表の平野久仁子さんに「日本におけるヨーガ実践の展開」についてお話しいただきました。お母様の体調不良をきっかけにお二人で近所のヨーガ教室に通われるようになったこと、お母様の体調が回復される様子をご覧になってヨーガへの関心を深めていかれたこと、インドでヨーガの理論と実践を幅広く学ばれたことなど、ご自身とヨーガの関わりについてお話しになりました。さらに、昨今日本でヨーガが急速に普及し、厚生労働省もインターネットの健康情報サイトで現代におけるヨーガは心身の健康法であると紹介していることや、日本における近現代のヨーガの歴史も説明されました。最後に、ヴィヴェーカーナンダの唱えたヨーガの伝統など、身体技法以外のヨーガについても学び、実践していくことが必要であると仰いました。(平野さんのスピーチは、次号以降のニュースレターに掲載の予定)

最後の講演は、インディアン・クラシカル・ダンス・トゥループ代表のシュバ・小久保・チャクラバルティさんで、「インドの舞台芸術と日本におけるインド舞踊」についてお話しくださいました。インドの古典舞踊に欠かせないインドの古典音楽は、大きく分けるとヒンデュスターニとカルナタキの二種類があること、日本では古くから神社

で舞を奉納する伝統があるがインドでも同様に古代から神々に踊りを捧げたこと、大半のインド古典舞踊では神様をテーマとした物語が演じ踊られることなどを説明されました。また、ご自身が奈良・東大寺で舞踊を奉納したときに感じた特別な感覚について話されました。そして、現在多くの日本人がインド古典舞踊を学んでいることを嬉しく思われ、今後も両国が互いに呼応しながら重要な文化を重層的に築き上げていくであろうと仰いました。最後に、シュバさんはステージの端に設置された演台から離れてステージの中央に歩み出られると、愛、悲しみ、嫉妬、敬意など人間の様々な感情を踊りのポーズや表現で表されて客席を魅了しました。(シュバさんのスピーチは、次号以降のニュースレターに掲載の予定)



ここで、予定されていた質疑応答の代わりに、インド料理研究家の香取薫さんにインド料理の調理法について簡単にご説明いただきました。

これで第1部が終了し、30分間の休憩時間となりました。この間ロビーで

は、チャンドラーニご夫妻が経営されるスパイスマジック カルカッタにご提供いただいたサモサ、インドのスイーツ、チャイの茶菓が来場者に配られました。

午後4時30分に第2部の文化プログラムが始まりました。初めに、協会の日本人信者さんとヨーガスクール・カイラス (<http://www.yoga-kailas.com>)の皆様が日本語の賛歌を斉唱されました。次に、インド人で結成されたアマチュアバンドのトウキョウウィークエンダーの方々がヒンディー語の有名な賛歌を数曲披露されました。



例年通り今年も、来場者に対し、生誕祝賀会のプログラム、協会の隔月発行誌『普遍の言葉』の特別号、協会の出版物等のカタログ、協会とその活動を紹介する小冊子の入った封筒が配布さ

れました。また、今後の活動を企画・実行する上で参考にさせていただくためにアンケートのご協力も仰ぎました。



プログラムの最後に、協会書記の三田村賢一さんが御礼の言葉と閉会の辞を述べられました。松井ケティ教授と横田さつきさんによる英語と日本語の司会で第 152 回生誕記念祝賀会の幕が閉じました。

## スワームー・ヴィヴェーカーナンダ第 152 回生誕記念祝賀会

### 開会の辞

インド大使館主席公使 アミット・クマール閣下

スワームー・メーダサーナンダ様  
ご来賓の皆様、ご参会の皆様、こんにちは！

まず始めに、当大使館で行われる、スワームー・ヴィヴェーカーナンダ生誕 152 年記念のイベントの開催にご尽力頂いた、日本ヴェーダーンタ協会に感謝を申しあげます。

友人の皆様、スワームー・ヴィヴェーカーナンダは、インドにおける先見の明を持った偉大な人物の一人です。彼のメッセージと教えは、現在でも私達に影響を与え続けています。彼の生きた時代だけではなく、現在も、そして将来においても、彼のメッセージと教えはその時代と密接に関わるものになるでしょう。それが、彼の教えの普遍的な魅力です。



1860 から 70 年までの 10 年間は、1861 年にタゴール、1863 年にスワームー・ヴィヴェーカーナンダ、1869 年にマハトマ・ガンジーが誕生したことにより、インドにとって極めて重要な 10 年となりました。この指導者達は、数え切れないほど多くの方法で、インドの運命を形作り、影響を与えました。

スワームー・ヴィヴェーカーナンダの人生は短いものでありましたが、インド社会に対して著しく大きな影響を与えました。当時、ヴィヴェーカーナンダの哲学は、社会を変革し、国が自信を取り戻す一助となりました。国民の自己評価が低く、多くのインド人が西

洋を崇拜し、お手本として見ていた時に、スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、彼らの自尊心と誇りを鼓舞しました。スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、大衆を代弁し、勤労についての明らかな哲学を語り、大規模な社会奉仕を率いました。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、インドで広く行われていたカースト差別について積極的に意識を払いました。彼は、大衆軽視と社会における女性の地位の低さが、インドが凋落した2つの原因だと述べました。ヴィヴェーカーナンダは、これらの大義のために献身的に力を注ぎました。彼はまた、インド人の盲目的な古い迷信への固守、西洋の模倣、そしてカースト差別を批判しました。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、深い精神性と批判的質問を調和させました。彼はしばしば教育の必要性を語り、人格を形成し、強い精神力や知性を養い、そして人を自立させるものは教育である、と述べました。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダが1893年にシカゴの世界宗教会議において行ったスピーチは、センセーションを起こしました。彼が、強く激しい調子で語った簡素な言葉と強い普遍性のメッセージにより、スワミー・ヴィヴェーカーナンダは世界宗教会議にお

いて最も注目を集め、人々に認められた人物となりました。スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、宗教は自己実現のためであり、議論、教義、理論は、それらがどれほど美しくとも、宗教の本質ではない。宗教とは、聞くことや認識することではなく、生きること、良く変化していくことであると述べました。スワミー・ヴィヴェーカーナンダにとって、宗教は人間に最初から備わっている神性を現すことでした。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、シカゴでの世界宗教会議へ向かう途中に、日本を短期間旅行しました。彼は、長崎、神戸、横浜、大阪、京都、東京といった日本の多くの都市を訪ねました。スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、日本の愛国心、勤勉さ、同化する力、清潔さ、美意識などの日本の特長の良い点に感銘を受けました。しかし、彼もまた、彼が会い交流した日本の友人に深い印象を残していきました。日本の再訪は実現しなかったものの、1901年にインドを訪れた識者の日本人仏僧の2人は、次に開かれる宗教会議にヴィヴェーカーナンダを招待しました。

2007年にインド国会の両院合同会議でスピーチを行った安倍首相は、初期の近代日本の文芸復興を率いた岡倉天心を導いたスワミー・ヴィヴェーカーナンダの言葉を引用しました。安倍首相は、「岡倉は彼に導かれ、その忠実

な弟子で有名な女性社会改革家、シスター・ニヴェーディターとも親交を持ちました。寛容の精神は、インドが世界の歴史に及ぼすことのできる貢献の一つであります。」と述べました。安倍首相はまた、「戦うのではなく助けよ、破壊ではなく同化、対立ではなく調和・平和である」と、スワミー・ヴィヴェーカーナンダのシカゴでの演説の言葉を引用し、その言葉は、当時よりも現代においてより切実な響きを帯びている、と述べました。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダの人生は、優れた才気とすべての人類に対する希望に溢れた、私達の人生という空を横切った赤々と燃える彗星のようであった、と多くの学者が形容しています。彼は、過去そして将来に渡り「すべての人類に対して影響を与える形なき声」でありつづけるでしょう。

結びに、スワミー・ヴィヴェーカーナンダのメッセージを広めるため、絶え間ない努力をして下さっている日本ヴェーターンタ協会の皆様に、改めて感謝を申し上げます。ありがとうございました。

(本スピーチ原稿は、クマール公使にご提供いただいた原稿を、人名表記を一部変更して掲載しています。)

## スワミー・ヴィヴェーカーナンダ第152回生誕記念祝賀会

## 「日本におけるインドの文化」 上智大学教授 ヴェリヤト・シリル神父



スワミー・ヴィヴェーカーナンダがある日、考えさせる文章をお書きになりました。それは、「神様が全ての人間の体の中におられると分かった瞬間に、私は自分他人の前に立ってその人の中の神様を見ることができると悟った。その瞬間に、私は全ての束縛から解放され、自由になった」この文章は明らかにスワミー・ヴィヴェーカーナンダの深い神秘体験を表しています。つまり自分が、全ての人間の中にいる神様を崇めることができるようになったということです。しかし、さらに深く検討すると、もっと深淵な意味があると思います。

この文章はヒンドウ教やインド哲学の根本的な真実、つまり全ての見えるものと見えないものに浸透している最高の霊、絶対者のブラフマンと、全ての人間の体に存在している永遠の魂アートマンの関係を示しているのではないかと思います。この真実は古代イ



ンドのウパニシャッド時代の偉大な思想家ヤーニャヴァルキヤやウッダラカ・アールニのような才幹のある人間によって我々に伝えられました。この真実はやがてラーマーヤナやマハーバーラタ物語、やプラーナ聖典などにより、インドとアジアのあらゆる地方に広がり、中世時代になると、シャンカラ、ラーマーヌジャ、ヴァツァバ、ニンバルカ、チャイタンヤなどの哲学者や思想家、精神も知性も共に天才的な人物たちが、一般の人々にこの真実を伝えるために努力しました。19世紀と20世紀になると、タゴール、マハートマ・ガンジー、アウロビンド、ラーダークリシュナン、ラーマクリシュナ・パラマハムサとスワミー・ヴィヴェーカーナンダのような有能な詩人、教育者、聖人、政治家、弁護士、哲学者たちが、この真実を世界中の国々に伝えました。特にラーマクリシュナ・パラマハムサとスワミー・ヴィヴェーカーナンダの貢献は真に比べものにならないほど突出しています。なぜなら、南アジア大陸の長い歴史を見れば分かるように、この二人だけがインド以外で生まれた宗教、つまりキリスト教とイスラム教もこの真実を伝えることができると主張したからです。

インド歴史を見れば分かるように、様々な時代にこの真実が国境を越えて東南アジアや東アジアの国々に広がり、スリランカ、インドネシア、

ラオス、タイ、ミャンマー、とカンボジアの人々はこの真実を歓迎しましたが、しかし言うまでもなく最も重要な国は日本でした。

インド思想はいつごろ日本の海岸に到達したのか。この件について本当の詳細を得ることは不可能です。しかし、私たちは、インド思想は確かに仏教とともに日本に入ったと断言できます。仏教はおよそ1,000年間の歴史をインドで終え、ネパール、チベット、中国と韓国を通して日本に入りました。その時、仏教を歓迎する人もいれば、拒否する人にいました。つまり、人々には仏教の神々を崇めることは神道の神々に対する冒瀆になるのではないかという恐れがありました。つまり神道の神の怒りで疫病や災難が起こるかもしれないという恐怖があったのです。しかし、徐々にこういう恐れはなくなり、一般の日本国民は仏教を受け入れるようになりました。なぜなら仏教は他の宗教の教えを取り入れる傾向があったからです。西暦593年には、摂政の宮である日本の聖徳太子が、国民と統治者の価値観を強調する聖典について言及し、十七条憲法をお書きになりました。それには中国から入って来た儒教と統合した仏教の教えが見られ、さらに調和、好感、及び良い統治の概念が見受けられます。この十七条憲法と同じ概念が、インドの叙事詩であるラーマーヤナ物語とマハーバーラタ物

語にも見られるのではないかと思います。

さきほど言ったように、インドで始まった仏教は、周りのあらゆる宗教の教理を、ある程度取り入れる傾向がありました。インドにおける仏教約 1,000 年間の歴史の間、ヒンドゥー教と仏教はお互いにかかなり強い影響を与え合い、両方の教理のあらゆる点が融合されました。その結果として、ヒンドゥー教の神々、概念や思想が入った仏教が、ネパール、チベット、中国や韓国を通り、ついに日本に到着しました。私が先に述べたウパニシャッド聖典に出て来る概念、つまり、最高の霊（ブラフマン）、と全ての人間の体に存在する永遠の魂（アートマン）、と付随の MAYA（マーヤー、幻想）と VIDYA（ヴィヂャー、明智）に似た概念が、日本仏教にも見られるのです。龍樹という古代インドの仏教学者の教えに基づいた日本仏教の三論宗について話しながら、東京帝國大學の高楠順次郎先生がこう言っています。「龍樹が、古代インドの偉大なヤーニャヴァルキヤが教えられた NETI NETI（しからず、しからず）という否定的なやりかたを、日本で発展させた」。高楠先生によれば、お釈迦様の教えをはっきり理解するためには、ウパニシャッド聖典のブラフマンとアートマンのことをどうしても理解する必要がある、ということです。

日本仏教史を見れば分かるように、ヒンドゥー教の大勢の神々が日本で崇められるようになりました。叙事詩の神話ではブラフマー神、ヴィシュヌ神、とシヴァ神の三大神が特にインドで崇拝され、互いに最高神としての位置を競い合いました。ブラフマー神は日本で梵天と呼ばれ、ヴェーダ時代の有名な戦士（特にリグ・ヴェーダ聖典において中心的な神でした）インドラ神は、帝釈天と呼ばれました。インドでは元々霊の主として崇められたクベラ神（別名ヴァイシュラーヴァナ神）は日本で毘沙門天になりました。インドの偉大な女神も日本で崇拝の対象になった幸運と美しさを象徴することで有名なヴィシュヌ神の妻、シュリーまたはラクシミー女神は、日本では吉祥天になりました。もう一人の人気のある女神は、ブラフマー神の妻サラスワチです。彼女は雄弁、学問、長命、音楽と勝利を象徴する女神で、日本では弁財天と呼ばれました。絵画や彫刻ではサラスワチ女神がインドの楽器のヴィーナやシタールを手に持っているように見えますが、通常、弁財天が手にしているのは日本の琵琶です。

日本文化のあらゆる概念のなかで、武士道は世界に知られ、非常に尊ばれている概念です。新渡戸 稲造の優れた書物「武士道」によれば、侍は八つ位の主な美德を持たなければならない、つまり、「義、勇、仁、礼、誠、名誉、忠

義、と人に勝ち己に勝つため」の美德です。武士道によれば「人間は絶対道徳的な標準、つまり論理を超越する標準に従って自分の生活を送らなければならないし、毎日の振る舞いによってその標準を子供にも伝える義務がある」とのことです。

武士道は日本文化のユニークなものです。しかしインド文化と比べてみると似ている部分が見られます。古代インドのヴェーダ文明、つまり、インダス文明の次に生まれアーリヤ人の侵入者が建てた最初の文明では、一般的な社会人の生活が「リタ」という概念によって支配されていました。リタは天則の意味で、周りの自然のあらゆる物は決まった法則によって動いているということです。太陽は毎日東から上り西の方に沈む、川の水は同じ方向に流れる、毎年雨が決まった時に降るなど、つまり、私たちの周りに見える自然は無秩序や混乱したものではなく、法則性や秩序あるものであるということです。ですから、我々人間も自然の一部なので、我々もできるだけリタに従って生活しなければならないということです。古代インド人は、自然は一見命があるように見えなくても生き物であり、そのため自然は全ての生命のある物と同様に愛と尊敬を受ける権利があると考えていました。このリタは物理的な法だったため、人間の体と関係があり、頭や魂と関係がないとしていま

した。しかし、やがてこのリタの概念が徹底的に変わり、ダルマという新しい概念が生まれました。

ダルマは人間の体だけではなく、頭と魂とも関係があり、やがて宗教や神様の同意語にもなっていました。ダルマに従う人間は戦場で自分より弱い敵と戦わないし、できるだけ無力な人や圧迫された人間を助けなければならない。ダルマに従う人は誠実な人で偽りなどを言わず、正しい道を歩むように努力しなければならない。つまり、ダルマのことを愛する人間は、侍のような美德を持つように努めなければならない。インドのバガヴァッド・ギーター聖典では、ダルマに従いアルジュナ王子が、最初に戦争で戦うことを拒否しました。つまり、もし戦えば自分が大勢の無実な人間、自分が尊敬し愛している人間をどうしても殺さなければならないと分かっていたからです。つまり、アルジュナ王子やインドの叙事詩に出ている他の英雄たちは、皆侍のような人間でした。つまり彼らも新渡戸稲造の名著「武士道」に書かれた侍の八つ位の美德に、心を動かされたということです。

インドと日本の繋がりや芸術の世界までも浸透しており、日本の歌舞伎とインド南部のケララ州のカタカリという舞踊劇の共通点については、かなり言及されています。両方とも多彩な衣

装と仮面、優雅で威厳のある仕種、そして俳優やダンサーの洗練された動きが、両国の偉大な古典的な芸術形式の相互遺産になっています。そして興味をそそる点は、歌舞伎とカタカリが両方とも17世紀に生まれ、両者とも神話と民俗物語と関係があり、さらに伝統的に両方とも女性の役を男性が演じる「女形（おやま）」がいることです。

ラビンドラナータ・タゴールとスワミー・ヴィヴェーカーナンダと密接な関係があった日本の有名な思想家であり文人でもある岡倉天心が、ある日次の文章を書きました。

すべての場合に心の平静を保たねばならぬ、そして談話は周囲の調和を決して乱さないように行なわなければならぬ。着物の格好や色彩、身体の均衡や歩行の様子などすべてが芸術的人格の表現でなければならぬ。これらの事がらは軽視することのできないものであった。というのは、人はおのれを美しくして始めて美に近づく権利が生まれるのであるから。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダが書かれた次の文章は、岡倉天心の文章と異なっています。しかし周りの人間と自然に対する我々の態度との関係についての考え方は、両者とも似ているとも言えます。スワミー・ヴィヴェーカーナンダいわく

周りの世界は我々の態度によって創造されている。思考によって周りの物が美しくなるし、醜くにもなる。世界全体が我々の頭のなかにあるので、周りの物を理解するために適切な見方を習いましょう。

つまり、この二人の思想家は最も重要なのは人間の態度だと言っているのです。人間と自然に対して我々はどのような態度を持っているのでしょうか。歓迎し受け入れる態度でしょうか。私たちは周りの人間と自然の優雅や美しさを意識しているのでしょうか。この問題を我々は検討するべきではないかと思えます。

17世紀、ムガル帝国の第5代君主シャー・ジャハーンのパラドクスで働いていたジャガンナータ・パンヂタというインド人の詩人で文芸評論家は、「美」のことをサンスクリット語で「ラマニヤ」と訳しました。つまり、彼によれば、ラマニヤはまさにその存在によって幸せを呼び起こすものだということです。しかし、ルスタム・メヘタという現代世界の学者は「サウन्दリヤ」（愛らしさ）と「ラーヴァンヤ」（優美）を区別し、ラーヴァンヤは内面や魂の美しさだと主張しました。日本とインドの思想家が我々に探究を促しているのは、まさにこのラーヴァンヤ（優美）のことです。ラーヴァンヤは多くの方法で明らか

かにされている美しさです。つまり、それは茶道、美しいサリーや着物、カタカリ、歌舞伎、や能楽のようなダンスやドラマ、そして柔道、空手、インド南部のケララ地方から伝わったカラリパヤットのような武道の中に共通して見られます。さらに、私たちが周りの人間を歓迎する笑顔と心の優しい行動の中に、特に「ラーヴァンヤ」が見られると言えましょう。

## 忘れられない物語

### ハチとミミズ

大変仲のよいマルハナバチとミミズがいました。あるときハチがミミズに言いました。「どうして君は肥だめの中に住んでいるの？僕の庭においでよ。バラやリュウゼツランやジャスミンがあるんだ。素晴らしい香りにきっと嬉しくなるよ」

ミミズはよく考えてから答えました。「分かった、じゃあ君の庭にお邪魔しよう」しかし、心の中では「僕に食べられるものがなかったらどうしよう、飢え死にってしまうかもしれない」と考え、念のために、慣れ親しんだ汚物をこっそり丸めて小さな玉を2つ作ると鼻の穴に詰めました。

ハチはこれに気付かずに、ミミズを自分の背中によじ登らせると、飛び立ち

ました。庭には甘くてかぐわしい香りが満ちていました。ハチはミミズをバラの上に下ろしてやりました。「これがバラという花だよ。この匂いはどう？」

空気の匂いをかぐと、ミミズは言いました。「どうってことはないよ。僕がよく知ってる匂いとおんなじさ」ミミズは少しも驚きませんでした。

ハチは不思議に思いました。「なぜミミズ君はこんなにいい香りが分からないんだろう？」その時、ミミズをよく見てみると鼻の穴に汚物の玉が詰まっていることに気付きました。ハチは一計を案じると、ミミズを水たまりに連れて行き、わざとミミズを滑らせて水の中に落としました。そしてミミズの背中の上に止まると、ミミズの頭を水中に沈めました。ミミズは鼻と喉に水が入って驚き、大きなくしゃみをしました。すると鼻に詰まっていた玉が勢いよく飛び出しました。

ハチはミミズを水から救い上げてやりました。ハチはまだハアハアと喘いでいるミミズをバラの所に再び連れて行きました。「わあ、なんていい香りだろう！バラの香りってこんなに素晴らしいんだね、気付かなかったよ」とミミズは言い、どの花の香りも心から褒めました。

ハチは言いました。「ここはいつでも

いい香りがしていたのに、来ようとしなかったのは君だよ。肥だめで作った玉を鼻に詰めるなんて」ハチはミミズに庭の中を案内し、他の花の香りを楽しませてやりました。

(Yogiji Maharaj 著 『Guru and Disciple, Tales of Wisdom』より)

## 今月の思想

エゴは言う、「すべてがうまく行けば、私は平安を得られる」

霊は言う、「平安を得なさい、そうすればすべてがうまく行く」

(マリアン・ウィリアムソン)

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: [info@vedanta.jp](mailto:info@vedanta.jp)